梵妻。へえゝ。
僧。三日目の晩ぢや、やうやッとの事で女子が產れ出たぢや。
梵妻。（吐息をして。）おゝ。
娘。まあ、好かつた。
僧。處が、生湯を使ひ終ると、間もなく、何の氣もなかつたその赤子がころりと息を引取つたぢや。
娘。まあ。
醫者。へえゝ。
梵妻。へえゝ、まあ、恐いこと！
醫者。不思議ですなあ。
僧。全く不思議のやうぢやつたと言ふでのう。生湯を使ひ居つた時は、

えらう元氣好く、大聲を擧げて泣き居つたさうぢやが、使ひ終つて着物を着せやうとすると、もう好けなくなり居つたと言ふでな。
梵妻。へえゝ。
醫者。愈々、その本妻の祟りが顯はれたのですな。
梵妻。恐いもんですわねえ。
娘。その赤ン坊が、ほんとに、可愛さうですわねえ——罪もないのに……
梵妻。ほんとにねえ。
僧。咳入る。
やゝ長き間。
鼠の走る足音。

僧。すると、その晩、その赤子が産婦の處へ夢枕に立つて出たわ。

醫者。へえゝ。

梵妻。まあ。

僧。その晩、産婦の枕元に、その赤子が出て來て、かう言ふのぢや。私は死んだのぢやない、殺されたのだ——

娘。まあ、恐い！

梵妻。へえゝ。

僧。私は殺されたのだ。私を殺した人は、五十日經たない中に、屹度死ぬ。さうしたら、私はまた産れて來る——と、かう言ふのだでのう。

醫者。へえゝ。

僧。その晩、産婦は、その夢を三度繰返して見た。さうだで……翌くる朝、早速主人にその話をして聽かせると、主人も驚いて、俺も見た——と言ふのぢや。姑さんも、見たと言ふのぢや。

梵妻。へえゝ。

僧。それで、三人一間に集つて、不思議だ、不思議だ——と話合つて居つたでのう。

醫者。へえゝ。

僧。すると、果してその通り……本妻は、それからと言ふもの、遽に病が重つて來て、とうとう、その赤子が五七日の晩、眠つてしまつた驚ぎぢや。

梵妻。へえゝ。

醫者。厭だなあ。
梵妻。罰ですわねえ。
娘。恐いことねえ。
學生。蔭り殺すなんて事が、出來るものでせうか。
僧。それは出來ますわ。けれど、そんな事をした人は、永世に佛果を得られなくなるでのう。
學生。へえゝ。
風の音。
梵妻。それから、お上人樣！　その後はどうなりました？
僧。おゝ、それから、その妾が本妻に直つて、暫くすると、また身籠つたで……

醫者。へえゝ。
僧。今度產れたのもまた女子ぢや。それが不思議な事に、前死んだ赤子と瓜二ッの顏立てぢやで……俺も一二度、その子を見た事があるが、肥つた、眼の大きい、好い娘ぢやつたでのう。
梵妻。へえゝ。
醫者。先の子が生れ變つて來たのですな。
僧。さうぢやらうでのう。
學生。ハ、、、。そんな都合の好い事が出來るもんですかねえ。
僧。仕樣と思ふたとて、出來る理もなからうがのう。また出來ぬとも言へぬものぢやらうで——兎に角、因緣ですわのう。

一座沈黙。長き間。爐の火消えんとするけはひ。

娘。煙を焚く。

醫者。おゝ、もう何時になりますえ？

娘。十一時頃でございませう。

醫者。ほう、もうさうなりますかい。えらいお邪魔をしてしまつて……どれ。

立ち上る。

梵妻。まあ、好いぢやござんせんか。

醫者。もう遲いで……ぢやあ、お上人様！　お喧しうございました。

僧。おゝ、もうお歸りかのう。

醫者。えらいお御馳走樣で……ぢやあ、あなた。

學生。もうお歸りですか。

醫者。えゝ。

梵妻。まあ、好いぢやござんせんか。

醫者。有難う。また來るで……（表口の方に歩む。ふと氣付いて。）おゝ、お安さん！　提燈を一ッ借りて行かうか。

梵妻。おゝ、お咲！　ちよつと提燈を……

娘。はい。

提燈を出し來り、火を點く。

醫者。土間に下り、頭巾を著る。

學生。立つて、送り來る。

梵妻。冷えますから、好く支度をしてお出でなさいまし。

醫者。おゝ、かうして出れば好いで……ぢやあ、提燈を一ッ。

娘。　はい。

醫者。（受取つて。）おゝ、有難う。ぢやあ、お喧しう。

娘。（潛戸を開く。）

學生。左樣なら。

梵妻。左樣なら。

醫者。（外に出で、空を見る。）おゝ、こりや寒いわい。（振向いて。）お喧しう。

娘。（潛戸より半身を顯して。）左樣なら、氣を付けていらつしやいまし。

醫者。去る。

やゝ長き間。

僧。（欠伸をして。）どれ、俺も寢やうかのう。

立つて、納戸の方に歩む。

梵妻。おや、お上人樣！　何處へいらつしやるえ？（送ひ來つて。）お寢みなさいますか。

僧。諾く。

梵妻。僧を助けて。兩人、納戸に入る。

學生。僧を見送り、靜かに左手に歩む。

梟の聲。

娘。潛戸を閉ぢ、鍵を下して、入り來る。

もうお寢みでございますか。

學生。（振向いて。）寢やうかと思ふんで……

娘。まあ、もう少しお談しなすつていらつしやいませな——私達はまだ寢やあ致しませんのですから。（爐の火を見て。）おゝ、すッかり火が

消えてしまつて……

爐に近寄り、帽を焚く。

學生。靜かに座に戻る。

梵妻。出で來る。

梵妻。おゝ、寒い。（爐に寄つて。）どれ、お見せな――その帽を。

娘に代つて火を起す。

奥、遠かに僧の咳入る聲。

梵妻。仕樣がない咳だねえ。お咲！　水を持つて行つてお上げな。

娘。はい。

梵妻。湯呑は此處にあるよ。

娘。はい

水を湯呑に注ぎ、持つて、納戸に去る。

間。

梵妻。あなた、さあ、お座りなさいまし。

學生。えゝ。

座る。

梵妻。何て冷える晩なんでござんせう。

學生。さうですねえ。

娘。出で來る。

梵妻。少しは、落着きなすつたやうだね。

娘。えゝ、漸く……

梵妻。ほんとに、何て言ふ咳なんだらう？

娘。それに何だか、少し酷くなつて來たやうですわねえ――この二三日。

梵妻。（吐息して。）困るねえ。どうしやうもありやしないに……

沈默。

長き間。風の音。

娘。座して、針仕事に掛る。

梵妻。（思ひ出して、笑ずるやうに、獨言。）森下のお婆さんも、とうとう死んだかねえ。（思ひ沈む。間。疑問に耐へぬやうなる調子にて。）有馬さん！　人間の、この壽命つてものは、決つて居るものでござんせうかねえ。

學生。無言、眼を見開いて、梵妻の顏を凝視す。

娘。縫物の手を休め、學生の顏を見、姫て、梵妻の顏を見る。

四人顏を見合、暴の聲。

折から、外方より二人の村民。提燈を下げ、消然として、清月の處に來掛る。（幕）

劇五篇

終

明治四十四年九月十日印刷
明治四十四年九月十五日發行

（劇五篇定價金壹圓）

著者　黑田玄一
神田區平富町二丁目一番地

發行者　長岡太一郎
東京區弓町二十四番地

印刷者　金子久太郎
東京區弓町二十四番地

印刷所　三協印刷株式會社

著作權所有

發賣元　東京市神田區裏神保町壹番地
振替口座三〇八六番　上田屋

45

088848-000-1

338-45

劇五篇

黒田　玄一／著

M44

DBK-0031